

# ショートショートに見る予測の読み

## —文章全体の構成を視野に入れた予測—

石黒 圭

【キーワード】 予測 文章型 謎 ヒント 伏線

### 1 はじめに

#### 1.1 文章レベルの予測

理解主体は、後に続く内容を予測しながら理解行為を進めるということを、現代日本語の語学的研究で提示したのは、おそらく寺村(1987)が最初であろう。寺村(1987)は、日本人の学部生 43 名を対象に、「その先生は」「その先生は私に」「その先生は私に国へ」「その先生は私に国へ帰ったら」という要素を順に提示し、その後どんな要素が来て文が完成するか予測させるという実験をおこない、その結果、日本語母語話者は驚くほどの正確さで先を予測していることを示した。こうした予測の研究は予測文法研究とよばれ、90年代に入り、市川(1993)、酒井他(1995)、大野他(1996)、予測文法班(1997)など、さかんにおこなわれるようになった。

寺村(1987)の研究をはじめ、これら一連の研究は、一文内における予測の研究であったが、その後、一文を越える予測についても、同様の研究が進められるようになった。一文内の予測の研究も重要であるが、庵(1999)が「文文法は時間の制約と独立に研究してもよいが、テキスト言語学においてはそれだけでは不十分で、極めて短時間で言語処理が可能であるのはなぜかという問いに答える必要がある」と述べている通り、理解主体が短時間で文章が理解できるメカニズムは、文章・談話研究でこそ明らかにされるべきであり、一文を越える予測について、こうした予測の研究が盛んになるのは、まさに必然であると思われる。石黒(1996)(1997)(1998a)(1998b)(1999)の一連の研究や、杉山他(1997)、談話展開予測班(1997)、ニュース聴解班(1997)、長文読解班(1997)の研究には、文という枠を越えた展開の予測にかんする記述が見られる。

しかし、現実の理解行為を考えた場合、一文内の予測、文を越えた展開の予測に加え、もう一つ、さらに大きな単位の予測を設定する必要があるように思われる。つまり、文章全体の構成を視野に入れた予測を考える必要があるということである。たとえば、社説を読むとき、冒頭部で書き手の主張が示されなかった場合、結末部にその主張が来ることを予想しないで読む読み手はいないだろうし、推理小説において、最後まで犯人が明らかにされることを期待せずに読む読み手もいないだろう。これは、読み手が当該の文章のテキスト・タイプ、つまり文章のジャンルにたいしてすでにある知識を持っているからこそ可能になる予測であるが、実際の理解のさいには、そうしたジャンル意識に、当該の文章から得られる言語情報をたくみに組み合わせながら文章全体の構成を予測し、理解を進めていると考えられる。そのことを示すのが本稿の目的である。

これまでの予測の研究において、表現の型というものが、言語を理解するさいに有効に機能していることがわかっている。具体的には、寺村(1987)において一文の理解のさいに文型というものが、石黒(1999)において連文の理解のさいに連文型というものが、それぞれ理解に役立てられているということが示されている。本稿ではさらに文章全体の構成を視野に入れた表現の型である文章型というものを設定したいと思う。文章型は、ジャンル意識の中の文章構成にかかわる部分と考えられるが、その文章型もまた、文型、連文型と同様、テキストを理解する過程で、具体的な言語表現に誘発されてはたらくものである。そのことを実際の文章を例にとり、説明していきたい。

## 1.2 方法と資料

すでに述べたように、本稿は文章全体の構成にかかわる予測について論じるものであるが、方法そのものは連文論の予測で用いた方法を援用しようと思う。すなわち、作品の冒頭から順に、文を単位として読み進み、一文を読むごとに後続の内容を予測するという方法である。当然のことながら、後続の内容を予測するさい、すでに読んだ文脈も考慮に入れて予測することになる。ただし、本稿は文章全体の構成にかかわる予測であるため、当該の文の直後に続く文の内容を予測するのではなく、ストーリーの展開、そして結末を予測し、それを記録することにする。

資料はショートショートを用いることにした。紙幅の都合上、短い資料であること、特定の書き手のみを扱うことによる予測の偏りを防ぐため、できるだけ多数の書き手の作品を扱えるものであること、さらには

作品の文章構成が比較的定型化しており、結末部に意外な結論がおかれることが多いことによる<sup>#1</sup>。

ただ、ショートショートを扱うということになると、意外な結末であることが要求されるため、社説のようにすなおに結論に至るような予測をはたらかせるというわけにはいかなくなる。書き手のほうでも、読み手が当該の表現を読んだとき、どのような予測をはたらかせるかを考え、そうした予測をはたらかせられないような表現に変えたり、または実際の結末には至らない別の予測がはたらくようにわざとしかけを作っておいたりする。このような読み手の予測を外すレトリックは、ユーモア・エッセイや推理小説などでひんばんに用いられるが、ショートショートの中でもかすおおく用いられている。このようなレトリックを使った部分もまた、予測研究にバラエティを与えてくれ、その意味でもすぐれた資料であると考えられる。

資料は『ショートショートの広場1』『ショートショートの広場2』（いずれも講談社文庫）を用いた。アンソロジーなので、書き手が多い分、さまざまなバリエーションの予測が期待できる。なお、資料の数は前者が58編、後者が60編であり、そのうち文章全体を視野に入れた予測のレトリックが使われていると明確に指摘できるのが、前者15編、後者24編（全体の約3分の1）である。

文章全体の構成に予測のレトリックが使われているショートショートは、基本的に「伏線→種明かし」の構図をとる。ただし、その伏線の張り方に多様性が見られる、大きくは、謎を明示的に提示するもの、謎を暗示的に提示するもの、誤解を誘導するものの三種類に分かれる。

謎を明示的に提示するものは、どこが謎であるが、それを早い段階で明らかにする。その後、その謎をめぐって文章が展開され、その途中で謎解きに役立つヒントをさりげなく示しながら、文章の結末部ではじめて種明かしをする。ヒントを明示しない場合であっても、ストーリー展開に必然性をもたせるため、種明かしにつながる伏線を読み手に気づかれないように配慮しつつ、配置しておく。謎を明示的に提示するものにおいては、関係の予測<sup>#2</sup>を利用したレトリックが用いられる。

謎を暗示的に提示するものは、どこが謎であるか、その焦点を読み手になかなか絞らせない。読み手としては予測が利きにくい状況で書き手の提示するストーリーについていくしかない。しかし、結末につながるヒントが徐々に示される中で、謎が何であるのか、そしてその謎がどう解決されるのか、つまり、謎そのものとその謎の中身とが同時にわかってくるようになる。また、そのヒントすら示されていない場合、読み手

としては書き手に連れられるままに読み進むしかないわけであるが、しかし結末に至る伏線はかならず張られており、謎とその中身がわかった瞬間、それまで予測のはたらかなかった伏線が有機的につながって見えてくる。謎を暗示的に提示するもので使われているのは、予測を誘発するレトリックではなく、むしろ予測をさせないレトリックである。

誤解を誘導するものは、誤った予測を導くものである。関係の予測にせよ、内容の予測<sup>註3</sup>にせよ、文章の結末がどうなるかというある程度の予測は立つが、その予測はきまって外される。内容の予測をさせ、それを外すことで成り立つレトリックである。したがって、書き手としては、正しい予測を喚起するような表現は極力避け、誤った予測を導く表現をできるだけ目立たせるように配置し、読み手に誤った先入観をできるだけ早くもたせるように仕向けるのである。

文章全体の構成にかかわる、ショートショートの中のこの三つの予測のレトリックは、箱とその中身にたとえるとよくわかるように思う。謎というのは箱で、最後に明かす種はその箱の中身である<sup>註4</sup>。箱の中身を最初に見せたら、ショートショートとしての面白みはなくなってしまふ。したがって、箱だけを見せて、その箱の中身をめぐって話をすすめていくのが「謎を明示的に提示するタイプ」である。それにたいし、箱の中身だけでなく、箱のありかすら見せないのが「謎を暗示的に提示するタイプ」である。そして、箱を見せたり、時には中身まで見せたりするものの、本物の箱は別に隠してあるのが「誤解を誘導するタイプ」である。

すでにふれたことではあるが、そこではまた、箱のありかやその中身を示唆するヒントが重要な役割を示す。明示的なヒントは、種明かしにいたる伏線が書き手によって明示的に示されるものであるが、読み手に想像の楽しみを残し、できるだけ後の段階で種明かしをするために、小出しに出されるのがふつうである。また、暗示的なヒントは、ストーリー展開に必然性をもたせるために、種明かしにいたる伏線を読み手に気づかれないように、読み手の予測が働かない形で配置するものである。

以下の議論では、文章全体の構成にかかわる予測のレトリックを、この、謎をめぐる三つのタイプ（「謎を明示的に提示するタイプ」「謎を暗示的に提示するタイプ」「誤解を誘導するタイプ」）と、ヒントをめぐる二つのタイプ（「明示的なヒント」「暗示的なヒント」）を組み合わせた六つのタイプに分け、説明することにする。

## 2 謎を明示的に提示

### 2.1 ヒントを明示的に提示

まず、稿末の資料編にある「三時五分前」という作品がどのような結末になるのかを予測しながら、稿末にある文章を、はじめから終わりまで読んでいただきたい。

この作品の謎は読みはじめてまもなくわかる。なぜキャサリンが神父にこんなにも執拗に結婚をせまるのか、である。カトリックの神父はプロテスタントの牧師と違い、結婚をすることができない。それにキャサリンは神父のことが好きだから結婚したいわけでもないらしい。「女として生まれてきたならば、一度は結婚してみたい」という表向きの理由だけでは、キャサリンの結婚にたいする異常なまでの焦りと執着が説明できない。その背後に隠された理由を知ってはじめて、この作品の謎は解ける。この謎を解くために、読み手は文章を読み進めることになる。

この謎を解くヒントはちりばめられている。①をはじめにその後もいく度か繰り返される「一生のお願い」という表現、②「他にお願い出来る方を知りません」からわかる、キャサリンの限られた人間関係、③「君がこの教会で懺悔する」からわかる、彼女の懺悔の必要性、④「力を尽くしてここに連れてきてあげた」からわかる、彼女の身の不自由さ、彼女の行動を支配する⑥「肩幅の広い三十前後のひげの男」の存在など、結末につながるヒントはあちこちに潜んでいる。

そして、何より大きいヒントになるのが、⑤「三時五分前まで」を皮切りに繰り返される時刻の表示、すなわち、三時に何かが起きることを予感させる時間設定と、⑦以降に描かれている、キャサリンの願いを断りたくても断りきれない神父の苦悩する姿である。個人差もあろうが、このあたりで、キャサリンが三時に死刑を執行されることに多くの読み手が気づくのではなかろうか。太宰治の「走れメロス」を読んだことがある人なら、その設定との共通性もヒントになるかもしれない。三時ちょうどに起こることに気づきさえすれば、それ以降のヒントは読み手の見通しの正しさへの確信を深めていく方向にはたらく。⑧「しみのついた灰色の壁」はおそらくは牢屋の壁であろうし、⑨「ひげの男」は死刑執行人であろう。⑩「私、とても幸せでした」と結婚式の幸せが完了形で語られ、⑪「ひげの男と共に外に出て行った」さきには死刑執行台が待ち受ける。⑫「胸の前で十字を切って両手を結んだ」神父のしぐさはキャサリンへの弔いの気持ちをこめたものであろう。そして、⑬の「十三階段」がだめ押しとなっている。

このように、読み手はそのヒントをひとつひとつ拾いあげ、それらを

つむぎながら、ストーリーの展開、そして結末の予測を試みていくことになる。そして、ある時点で結末までの見通しが立ったとき、その見通しを、さらに後に出現するヒントとひとつひとつ照合し、あるときは自らの見通しへの確信を深めながら、また、あるときは誤った見通しに修正を加えながら、その見通しが最終的に正しいどうかを確かめるべく、結末まで読み進めるのである。

この作品は冒頭における謎の設定が明確であり、その謎が徐々に解けていくようにヒントが小出しに出されている。つまり、謎もヒントも結末に直接つながっていくように構成されており、その意味で謎とヒントが明示的な文章である。

## 2.2 ヒントを暗示的に提示

資料編の2番目の文章「平和な時代」の謎もはっきりしている。「装置」の正体はいったい何なのか、ということである。この装置がよくないものであることは、文章を読み始めてすぐにわかる。①「人々が一瞬、顔をしかめる」ような、②「問題の」装置だからである。

そして、その装置の前である事件が起こる。装置のレバーに手を掛けた男にたいし、③「何をしますか!」、④「ばかなことはやめなさい」と声を上げる人がいる。なおもレバーに手を掛ける男にたいし、⑤「人垣はじりじりと輪を縮めて」いく。男の発射した銃弾に倒れる人がいようとも、それにひるまずに⑥「人々はじりじりと彼に近づいていく」。そして、最後にはピストルを乱射する⑦「男に飛びかか」ることになる。

ここまででわかることは、その装置が人々が命をかけてでも守り通さなければならぬものである、ということである。大衆は、一般に他人の行動に無関心なものである。その大衆がここまで必死になって、しかも力をあわせて食い止めなければならぬ危険な装置の正体は何なのか。謎は深まる一方である。読み進めていくにつれて徐々に謎が解けていった「三時五分前」と違い、この、読み進むにつれて次第に謎が深まるように書かれている。そして、その深まった謎の解答が突然書き手の側から開示され、読み手は大衆の行動の意味を悟るのである。

ヒントが暗示的に示される、言い換えると、ヒントが書き手の側から意図的には示されない文章では、謎は徐々に解決するどころか、むしろ物語の進行とともに深まるようになっていく。そして、種明かしがされることによって、その謎の正体が突然現れ、それまで隠されていた伏線が見えるというしかけになっている。

### 3 謎を暗示的に提示

#### 3.1 ヒントを明示的に提示

謎を明示的に提示している作品とは異なり、「約分」においては、話の焦点がはっきりしない。ただ、①の「光二は小学校五年の男の子で、できの悪い生徒」であること、③の「算数が得意」であることが、ストーリーと何らかの関連があることを予想させる。②の「42人の生徒がいる」とわざわざ人数まで示していることも重要な情報で、読み手によっては、これを有標なものとしてとらえることができるかもしれない。いずれにしても、最初の段落で話の焦点は見えないが、結末につながるヒントが明示されていることはわかるだろう。

第二段落で光二は騒ぐ他の生徒を尻目に④「約分に取り掛」かる。なぜ光二が懸命に約分に取り組んでいるのかはこの時点でははっきりしないが、約分が進むにつれて、⑤「光二の目が光った」、⑥「光二の顔は獲物を追いつめたライオンのそれに似てきた」と光二の約分への集中力の高まりが示されていることから、ストーリーはクライマックスへと近づいていることがわかる。そして、最後に⑦「1/1 という分数が1であることに気づいた時」、読み手によっては、この分数がもともとクラスの順位を表していたものであることを思い出し、「顔をあげて恥ずかしそうに言」う光二のことばが何であるか、予測がつくようになる。

このように、謎を暗示的に、しかしヒントを明示的に示すものでは、読み手は最初謎が明示されないために話がどのように展開するかは予測できないが、徐々に示されるヒントを頼りに、おぼろげながらではあるが、次第に謎とその答えを見出すことができるようになる。

#### 3.2 ヒントを暗示的に提示

「親愛なるジョージ」は話の焦点がはっきりしない。読んでいても、次に何が起こるかまったくわからない。しいて言えば、ジョージがかつてのライバルであるブラウンをなつかしんでいるような、そんな文章にも読める。そのような感傷的なトーンで最後までゆけば、それもひとつの作品なのであろうが、ブラウンがマフィアに追われ、殺される寸前であるということを考えると、話がそのまま終わるとも思えない。そうすると、やはり話の焦点が見えてこない、何が謎なのかははっきりしない文章である。

また、最後まで読んでしまえば、ジョージとブラウンが対立し、ジョージが勝ったこと(①②⑬⑭)、ブラウンがマフィアに追われ、殺される寸前であったこと(⑤⑥⑭)、ブラウンがジョージにカバンを贈った

こと(⑦⑪)、コーヒーとタバコを用意させたこと(⑧⑨⑩⑮⑯)などがすべて結末への伏線であって、伏線がたくみに張られていたことがわかるのであるが、読んでいるときはジョージの視点から読むように工夫されているので、読み手は③④などのブラウンのたくみな嘘に、ジョージとともにだまされるしかけになっている。

このように、謎もヒントも明示的に示さない文章においては、書き手は予測を誘発する表現の代わりに、予測を引き起こさないような表現を使うことで、読み手の予測をコントロールしていると考えられる。

## 4 誤解の誘導

### 4.1 ヒントを明示的に提示

誤解の誘導は、読み手を、実際のストーリーとは違う、誤ったストーリーに読み手を導き、結末でどんでん返しをしてみせるものである。誤解を誘導するという性格上、謎を提示するものと違い、ヒントになるものはできるだけ明示しないようにし、たとえ明示するにしても、種明かしの直前でのみ示すことになる。「ご近所のピアノ」で言えば、種明かしの文のすぐ前、④の文ではじめて患者と医者という関係から、被害者と加害者という関係をしめし、そこから種明かしの文へとつないでいるのである。ただ、登場人物が二人しかおらず、比較的種のわかりやすい話なので、①「近所」や③「相手の方」というあえてばかす表現を使っているが、読み手のほうで、そこに「医者」を当てはめることができれば、もっと早い段階で種がわかる可能性もある。

したがって、書き手としては、①や③のような、示すことを意図していない暗示的なヒントをできるだけ悟られないように、誤解の構図をできるだけ早く作り上げ、そこに読み手を誘導する必要がある。患者がそのことばを否定しなかったという意味で、やや不自然とも思える②の伏線を張ったのも、誤解の構図を強化する必要があったためと思われる。

### 4.2 ヒントを暗示的に提示

「盲点」は、文章が短いせいもあるが、「ご近所のピアノ」と違い、まったくヒントを出さずにいきなり種明かしをしている。読み手の関心は、博士が災難予知メガネをかけ、そのメガネを通して博士自身にどんな災難がふりかかると見たのか、という方向に向かっており、メガネの柄で目を突くということはまさに「盲点」になっている。

こうしてみると、誤解誘導が成功するかどうかは、いかに早い段階で読み手に先入観を抱かせ、自然な形で読み手の中に誤解の構図を作

り上げるか、にかかっているように思われる。

## 5 まとめ

ショートショートという限られたジャンルではあるが、読み手が文章の展開、さらには結末を予測しながら文章を理解しているということは示せたように思う。

また、文章全体の構成の予測を利用したショートショートでは、書き手が読み手のそうした予測能力を考慮し、中身は提示せずに箱だけを提示して、その箱の中身をめぐって文章を展開させる「謎を明示的に提示するタイプ」、また、読み手の予測能力がはたらかないように中身だけでなく箱そのものもぎりぎりまで隠しておく「謎を暗示的に提示するタイプ」、さらには、読み手の予測能力を逆用し、予測能力によって箱だけでなく、その中身まで見ていたはずが、実は違う箱を見せられていたことに後で気づく「誤解を誘導するタイプ」の三つのタイプがあった。そして、箱のありかや中身を間接的に示唆するヒントもときには小出しに明示しながら、読み手の想像力をかきたて、書き手が文章を展開していくこともわかった。

今回はショートショートという特殊なジャンルでの試みだったが、今後は、論説文や一般的な小説、エッセイなどでも、それぞれのジャンルにふさわしい、文章全体の構成を予測する方法があることを論証していきたいと考えている。

## 注

1. 星(1985:313)に「ショートショートというと「新鮮なアイデア」と「完全なプロット」と「意外な結末」の三条件をあげる人が多い。数十年前のアメリカでは、そのようなタイプのものが多く書かれた。しかし、ショートショートの本来の意味は「短い短編小説」で、制約などないのだ」と述べられているように、ショートショートだからといって必ずしも意外な結末が来るとは限らない。そのことは、本文中で述べたように、資料として集めたのが全体の3分の1という数字に表れている。しかし、それでも意外な結末でおわるものが多いのもまた事実であり、そうしたジャンル意識を多くの読み手が持っていると考えても差し支えないだろう。
2. 関係の予測とは、当該文から後続文の関係(理由、語句の説明、結果、逆接等)を予測するもので、後続文の具体的な内容までは予測できないものである。

3. 内容の予測とは、当該文と後続文と関係に加えて、後続文の具体的な内容までも予測できる予測のことで、多くの場合、読み手の背景知識や、先行文脈による支えが必要となる。
4. 箱のありかかを予測するのが関係の予測、箱の中身を予測するのが内容の予測に当る。
5. 資料編の作品中の実線の下線は伏線となっている表現、破線の下線は種明かしの表現を示している。

## 資料

- ・星新一編(1985)『ショートショート of the 広場 1』講談社文庫
- ・星新一編(1989)『ショートショート of the 広場 2』講談社文庫

## 参考文献

- ・庵功雄(1999)「テキスト言語学の観点から見た談話・テキスト研究概観」『言語文化』(一橋大学語学研究室) 36
- ・石黒圭(1996)「予測の読み 一連文論への一試論一」『表現研究』64
- ・———(1997)「予測の読み 一予測に働く要因の俯瞰一」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』42・3
- ・———(1998a)「理由の予測 一予測の読みの一側面一」『日本語教育』96
- ・———(1998b)「逆接の予測 一予測の読みの一側面一」『早稲田日本語研究』6
- ・———(1999)「並立の予測 一予測の読みの一側面一」『国語学研究与資料』23
- ・市川保子(1993)「外国人日本語学習者の予測の能力と文法的知識」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8
- ・大野早苗・堀和佳子・八若寿美子・池上摩希子・内田安伊子・郭末任・許夏珮・長友和彦(1996)「予測文法研究一後続文完成課題から見た日本語母語話者と日本語学習者の予測能力について一」『日本語教育』91
- ・酒井たか子(1995)「文の適切性判断のための一試案 一後続文完成問題における日本人との比較一」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10
- ・杉山ますよ・田代ひとみ・西由美子(1997)「読解における日本語母語話者・日本語学習者の予測能力」『日本語教育』92
- ・寺村秀夫(1987)「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語

学』6-3

・平田悦朗（研究代表者）（1997）「日本語学習者の文の予測能力に関する研究及び読解力・聴解力向上のための教材開発」平成8年度文部省科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書（課題番号06451159）

資料編<sup>注5</sup>

### 三時五分前

佐々木清隆

「結婚してくださいッ」

キャサリンの悲痛な叫び声が薄暗い礼拝堂に響き渡った。

二列に整然と並べられた五人掛けの長椅子。その一番前の長椅子の片隅に、軀（からだ）を小刻みに震わせている女がいた。面を上げず、ジッと床を見据えたままにいる。

短髪で、まるで化粧気のない華奢（きゃしゃ）な女だった。

キャサリンが視線を落としている所から半歩ほど前に一足の黒い靴がある。靴は瘦身のロバート・パーキンス神父の軀を支えていた。

彼は丸い銀縁の眼鏡をはずすと、親指と人差し指でそつと目頭を押えた。

「正気かね」

神父は眼鏡を掛け、おもむろに言った。

「キャサリン、あなたは自分が何を言っているのか判っているのですか」

キャサリンは両手をグッと握りしめた。

「神父様は先程おっしゃったはずです。『私に出来ることがあれば何でもしてあげよう』と」

「……………」

「神様の御前で確におっしゃいました。神父様は嘘を言われられない方だと思います」

キャサリンは毅然（きぜん）と言い放った。神父の顔が苦渋でゆがんだ。

「あなたは昂奮（きょうふん）しておられる」

「私が冷静であることは、確信を持って言えることです」

神父は無言のまま首を左右に振った。

「あなたと結婚したいんです。①私の一生のお願いを叶（かな）えてはもらえないものでしょうか」

彼女は初めて顔を上げ、神父を食い入るように見つめた。すべてをかなぐり捨てたその眼差しに気圧（けお）され、ロバート・パーキンス神父は胸の内で後退

りをした。

「女として生まれてきたならば、一度は結婚してみたい。神父様にもこの気持ちはお判りになることと思います」

「だが何故わたしと」

「②他にお願ひ出来る方を知りません」

神父は下唇を噛みしめた。

「神父様はこの十字架の前で、私の望みを聞いて下さるとおっしゃいました」

キャサリンの声は深く沈んでいた。

彼は怒濤のように押し寄せる彼女の氣迫に耐えきれず、思わず声を荒だてた。

「私は神父だッ。君がこんな莫迦（ばか）なことを言い出すとは思ってもみなかった。わたしは③君がこの教会で懺悔するものと思ったからこそ、④力を尽くしてここに連れてきてあげたんだ。それを……」

「私の願ひを叶えて下さいッ。叶えて欲しいんです」

キャサリンは床に膝を落とし、神父に懇願した。両眼にうつつらと涙がにじんできた。

この世に生を享（う）けてから四十八年間、神父はこうした形で女に泣きつかれた経験は皆無と言っていい。

彼は踵を返し、彼女に背を向けた。涙を見ることに耐えられなかったのだ。キャサリンは力なく立ち上がり、黒い僧服に言葉を掛けた。

「明日、⑤三時五分前まであなたをお待ちしております。神父様は、私の一生の願ひを、純白のウェディングドレスを身にまどってみたいという願ひを叶えて下さる方だと信じております」

彼女の言葉が言い終るか終らないかのうちに、パターンと礼拝堂の重い扉が開いた。

⑥肩幅の広い三十前後のひげの男が、扉の外から彼女に出るよう顎（あご）で促（うなが）した。

神父は振り返らなかった。

キャサリンは扉に向けてゆっくりと足を運ぶのだった。そして戸口の所まで来ると歩みを止め、

「女は一度は……」

そう呟やいて戸外に出た。

一夜が明けた。

⑦もう陽は中天を過ぎたというのに、神父は昨夜からずっと礼拝堂の長椅子に座り続けたままでいる。

「何故わたしでなければいけないんだ」

机に肘（ひじ）をつき、両手をきつく握りしめて作ったこぶしをコツコツと額に当てた。

二時を回った。

神父の耳にキャサリンの言葉が響いてくる。

『三時五分前まであなたをお待ちしております』

彼は眉根に皺を寄せた。彼女の気持ちは痛いほどよく判る。しかし……。夕べから幾度反芻（はんすう）しただろうか。

確かに彼女にとって結婚を申し込む相手は私をおいて他にいなかったのかもしれない。

「三時五分前までか」

神父は何気なく呟いた。その時、彼は頭の中に目も眩（くら）むような光が炸裂するのを感じた。

三時五分前……三時……三時五分過ぎ。

このまま時が過ぎ去って行ったとしたら、自分はここにおいて果たして後悔しないのだろうか。彼は神の声を聞いたような気がした。

ロバート・パーキンス神父は血相を変えて礼拝堂を飛び出して行った。

二時十七分

神父はタクシーの中にいた。

「三番街までやってくれ。買い物があるんだ。グズグズしておれない。すべての責任はわたしが持つからぶっとばしてくれ」

二時二十九分

神父は洋服屋にいた。

「この衣装を箱に入れてくれ。お代はあとだ。夜、教会に金を取りに来たまえ」

二時四十五分

神父は平べったい箱を抱え、キャサリンの前に立っていた。

「来て下すったんですね」

彼はニッコリと微笑んだ。

「これがウェディングドレスです。わたしは後ろを向いているから、すぐに着換えなさい」

神父は彼女に箱を手渡すと、⑧しみのついた灰色の壁のほうに顔を向けた。

二時五十分

神父が自ら行った結婚式により、二人は永遠の愛を誓い合った。

三時五分前

鉄の重い扉が開き、⑨ひげの男が入って来た。

「私の一生の願いを聞き入れて下さって感謝しております」

ひげの男は神父と顔を見合わせ頷くと、キャサリンに顎で外に出るよう促した。

「ロバート、⑩私、とても幸せでした」

彼女はほんのひと時の間、神父と眼を合わせると⑪ひげの男と共に外に出て行った。

神父は彼女の後ろ姿を無言で見送り、やがて静かに両眼を閉じ、⑫胸の前で十字を切って両手を結んだ。

純白のウェディングドレスに身を包んだキャサリンは別室に入ると、目を輝かせながら、一步一步⑬十三階段を上って行った。

三時

殺人罪により、パーキンス夫人の死刑が執行された。

(『ショートショート of the 広場 1』所収)

## 平和な時代

山科武司

ボーン。午前八時の時報が鳴った。①足早に歩いていた人々が一瞬、顔をしかめる。②問題の装置が作動し始めたからだ。装置は駅前の広場のよく目立つところに備え付けられている。使い方は誰でも知っている。横のレバーを下に降ろし、真中のボタンを押すだけでいい。

たいていの人々は装置から目をそむけて通り過ぎてゆく。ぼんやりと装置の前に立っている人がある時もあるが、そんな人は通行人に肩を叩かれてはっと我に帰り、後ろめたそうに立ち去っていくものであった。

昼下がり。一人の男が装置の前をうろうろしている。通行人はうさんくさい目で男を見るのだが、一向にお構いなしだ。やがて、男は思い切ったように装置のレバーに手を掛けた。

「③何をするんですか!」

誰かが声をあげた。レバーから手を離すと男はゆっくりとふり向いた。その手にはピストルが握られていた。周囲にさっと緊張感が漂う。

「④ばかなことはやめなさい」

男を遠巻きしてできた人垣の中の一人が言った。

「うるさい！」男は叫んだ。

「近寄ってくるやつはぶっ殺すぞ！」

⑤だが、男が再びレバーに手を掛けると、人垣はじりじりと輪を縮めていった。

「こっちへ来るなって言っただろう!? 来るな！」

そう言いながら、男は一発、発射した。誰かが倒れたようだった。⑥それでも人々はじりじりと彼に近づいていく。

「ひい」

男は悲鳴をあげてピストルを乱射した。⑦次の瞬間、人々はいっせいに男に飛びかかった。

「助けてくれえ！」

数分後、彼の顔は風船玉のように真っ赤にはれあがり、服は破れ、鼻血やらで血だらけになっていた。男になぐりかかったうちの一人が男につばをはきかけ、いまいましそに装置のほうを見て、吐き捨てるように言った。

「全く、なんでこんなことになっちまったんだろう」

問題の装置の横には大きくこう書かれた看板がある。

「これはわが国の核ミサイルの  
発射ボタンです。午前八時から  
午後五時まで使用可能」

こんなことになった原因が各国の軍備競争であることは言うまでもない。もし核戦争が起これば人類の、いや全生物の生存可能性が零パーセントであることはどんなコンピューターに計算させても明らかなことだった。その頃になってやっと事の重大性に気付いたのだろうか。各国首脳は人類の生死を握っているという責任の重さに耐えられなくなっていた。ノイローゼになる者もいた。このままでは我々全員がおかしくなってしまう。そう考えた彼らは苦しまぎれの妙案を思いついた。自分たちが核ミサイルの発射ボタンを管理しているからこうなるのだ。発射ボタンを大衆に開放しよう、と考えた。つまり大衆に責任を負わせてしまおうというわけである。こうして核ミサイルの発射ボタン装置は各国の大都市に設置された……。

ポーン。午後五時の時報が鳴った。人々は一様にほっとした表情を見せる。今や、人類の運命を握っているのは大衆であった。とにかく、平和な時代である。

(『ショートショートの大場1』所収)

## 約分

石川豊喜

①光二は小学校五年の男の子で、できの悪い生徒だった。②クラスには42人の生徒がいるが光二はいつもビリだった。しかし、そんな光二にも得意な教科があった。③光二は算数が得意だった。

三学期の終業式の日がやってきた。通信簿が子供たち一人一人に手渡されると教室は蜂の巣をつついたような騒ぎになった。光二はそんな騒ぎには巻き込まれずに一生懸命通信簿を見ていた。算数が5で、あとは全部1であったが光二は少しも落ち込んでいなかった。光二の目は通信簿の片隅に釘付けにされていた。そこには $42/42$ という分数があった。④算数が得意な光二はさっそく約分に取り掛かった。分母、分子とも2で割れる。 $21/21$ になった。⑤ $21/21$ はまだ約分できるぞと光二の目が光った。分母、分子とも3で割れる。 $7/7$ になった。⑥光二の顔は獲物を追いつめたライオンのそれに似てきた。もっと約分できる。分母、分子とも7で割れる。 $1/1$ になった。⑦ $1/1$ という分数が1であることに気づいた時、光二は顔をあげて恥ずかしそうに言った。

「またクラスで1番か」

(『ショートショート of 広場2』所収)

## 親愛なるジョージへ

松下貴昭

“友よ……今は敢(あ)えて『友』と呼ばせて貰う。①今まで、君とは随分(ずいぶん)いがみ合ってきたものだ。②女の事といい、仕事といい、君とはことごとく対立してきた。③しかし、私にしてみても、本気で君を嫌っていた訳ではない、その点では君も同じだろうと思っている。④すべてが懐かしい思い出だ。

こんな風に感じられるようになったのも、自分に死期が近づいたからであろうか。本当は君と語り合いながら、飲み明かしたい気分なのだが、私には時間が無いのだ。

私は、スペインでこの手紙を書いている。⑤会社を辞(や)めてから、少々、危ない橋を渡ってきたが、今回の大失敗で、マフィアに追われているのだ。⑥見つかるのは時間の問題だし、そうなれば殺されるのは分かりきっている。

君がこの手紙を手に行っている頃は、既に私が自らの命を絶った後だろう。⑦だから、一緒に送ったカバン、きっと見覚えがあるだろうと思う、若い頃から愛用してきた私のカバンを形見として、受け取ってほしい。⑧そして、最後にひとつ、

君とコーヒーを飲みたい。⑨向かい合わせに、私と君のコーヒーを淹（い）れ、私のコーヒーにはミルクを、ほんの少し。⑩カップの横には、タバコもほしい。

そして私を、ほんの少しだけでも、思い出してほしい。

親愛なるジョージへ

ブラウン”

ジョージは、たった今届いたばかりの手紙を読み終えると、一緒に届いた小包を開けた。⑪そして、ブラウンと共に、幾多の危機を潜（くぐ）り抜けてきたであろう、その古びたカバンを見つめた。

（あいつが会社を辞めて……十二年か）

⑫彼等は、同じ会社に入った後、仕事で競（せ）り合い、又、社長の娘を奪い合った。⑬結局、ジョージが勝ち、次期社長のイスを手に入れ、ブラウンは会社を辞めた。⑭それ以来、何の音沙汰（おとさた）もなかったが、最近になってジョージの所へ、マフィアらしい男が現れ、ブラウンが来たら教えるようにと、威（おど）しがきていた。

⑮ジョージは湯を沸かすと、上等の豆を碾（ひ）き、二人分のコーヒーを淹れた。⑯カップをテーブルに並べると、タバコをふかして、ブラウンのカップの横に置き、ブラウンのカバンをイスの上に置くと、その向かい側に座った。

コーヒーをひと口飲むと、ジョージは、目頭が熱くなるのを感じた。

「あいつ……」

その時、激しくドアが開き、一目でマフィアとわかる男達が入って来た。そして、二人分のコーヒー、吸いかけのタバコ、ブラウンのカバンを見て、

「貴様、やつを逃がしたな！」

そう叫ぶと、男達のピストルが火を吹いた。

（『ショートショートの広場2』所収）

## ご近所のピアノ

香月桂

「先生、こんにちは」

「おや。どうしました？」

「じつは、①近所の家のピアノが、とても気になるんです」

「それはよくありませんね」

「うるさくてうるさくてたまらないんですよ。夜も眠れないくらいなんです。それで近ごろ少しノイローゼ気味で……」

「②それでこの病院に、カウンセリングにいらっしやっただけですね。なるほど。そんなにうるさいんですか」

「ええ。毎日毎日朝から晩まで、ガンガン聞こえるんですよ。まったく、こっちの身にもなって欲しいもんです」

「③相手の方は、そのことに全然気がついていないんですね」

「ええ。いつまでたっても全然気がつかないから、いつそのこと怒鳴り込んでやろうかとも思ったんですが……」

「うーん、もうちょっと、穏やかには話し合えないものでしょうか」

「ええ。④だからこうやって話し合いに来たんです。先生、お宅のピアノ、もう少し静かになりませんか?」

(『ショートショート of the 広場 2』所収)

## 盲点

輝鷹あち

博士「いやあ、とうとう完成したぞ！ 長年の研究の成果！ すばらしいメガネができた！」

助手「これまた、ずいぶん変わったメガネですね。どういった成果が……」

博士「うむ。これはな、〔災難予知メガネ〕といってな、かけるだけで、近い将来わが身にふりかかる災難が見えるんじゃ」

助手「へえー。そうなったら、もうケガとか事故とかは、死語同然ですね」

博士「そうとも。うらやましいであろう。①では、さっそく私がかけてみることに――わあッ!」

助手「どうしました?」

博士「メガネの柄で、目を突いた……」

(『ショートショート of the 広場 2』所収)

## (付記)

本稿の内容は、2000年9月23日(土)に行われた第2回早稲田大学文章・談話研究会(佐久間まゆみ代表)での発表に基づいている。発表のさい、貴重なご意見をおよせくださった方々にふかく感謝申し上げる。

(いしぐろ けい/一橋大学)